アカデミック・ライティング6の原則

1　短縮形では書かない

don't（do not）やTHX（Thanks）のような短縮形はライティングでは用いない。ただし、Acronym（頭字語）は使っても良い（e.g. World Health Organization → WHO）。

2　稚拙に見えるため同じ単語は極力繰り返さない

言い換えや類義表現を覚えよう。ただしコロケーションが不明なものを使うとミスを誘発するため、他の適切な表現が思い浮かばないときには、同じ単語を繰り返しても良い。

3　アカデミックな英作文においては疑問形で書かない

Is it really true?「これは真実だろうか？」のような形で問題提起をしない。

4　thing,stuff など漠然としすぎている単語は、あまり使わないこと

ただし、言い換えに困った場合、使う単語が浮かばない場合にはコロケーションやニュアンスの分からない難しい単語を使うよりは thing,stuff を使う。

5　抽象名詞はあまり使わないこと

例えば、importance（重要性）という単語を使うと、正しいコロケーションなのか判断できないことが多い。それならば、how important ~ というように句で表現した方がミスは抑えられる。

6　英英辞書を積極的に活用しよう

英和辞典、和英辞典はもちろん様々な表現が載っていて便利だが、あまりに頼りすぎると実際にはあまり使われない表現、文脈から判断するとおかしい表現を使ってしまう可能性がある。何を使って調べれば良いのか分からないという人は次頁の「英英辞書、コーパスの重要性」をチェック。

英英辞書、コーパスの重要性

英語学習で欠かせないのが、使いたい表現を調べるという行為だ。しかし、やみくもにネットで調べても色々な情報が錯綜していてどれを信用したら良いか分からないだろう。検索して最初に出てきたサイトの情報が間違っているということもある。そこで使いたい表現が適切かどうか確かめたいときに役立つツールを紹介する。

①英英辞書

英英辞書と聞くと、英語で書かれているから難しいというイメージが先行してしまうかもしれないが、実際にロングマンやオックスフォードの英英辞書を見れば比較的簡単な英語で説明されていることが分かる。どんな場面で使われているかも明確に示されているので調べ物の際に何度か試してみよう。

②コーパス

聞いたことがない人も多いツールだと思うが、英語を学習していく上でかなり役立つのでこの際に覚えておこう。コーパスとは、新聞や論文、インターネットサイトなどから莫大な量の文章を収集し、データベース化したものだ。コーパスを使えば、気になる単語や表現が実際にどのように使われているのか、その単語と相性の良い単語（コロケーション）は何か、自分が使った表現が実際に英語圏で使われているのか、などが確認できる。

有名な英語のコーパスサイトとしては、COCA(Corpus of Contemporary American English) や iWeb が存在する。

コーパスは膨大な数のネイティブが実際に使った表現を参照するという点で信用のあるソースだと言える。自分が考えた表現をコーパスで検索にかけて１件もヒットしなかったら、それはネイティブが使っていない表現とみなすことができるため、その表現は理解してもらえないという可能性を知ることができる。

オンラインソース一覧

ロングマン英英辞書	https://www.ldoceonline.com/
オックスフォード英英辞書	https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/
COCA	https://www.english-corpora.org/coca/
iWeb	https://www.english-corpora.org/iweb/

COCAとiWebの詳しい使い方

Google 翻訳や和英辞書、weblio などで出てきた表現をそのまま使ってしまう人もいるだろう。これらを使うこと自体は全く悪くないのだが、何も考えずそのまま使ってしまうことに問題がある。出てきた表現が本当に英語圏で使われている表現なのかを確認するために、英英辞書やコーパスでも調べ、より自然な表現を身に付けよう。

参考

内田諭，実践で学ぶコーパス活用法，研究社ウェブマガジン Linga，研究社，
http://www.kenkyusha.co.jp/uploads/lingua/prt/13/UchidaSatoru1408.html
（参照 2020-05-27）

第1部 動詞

have
make
use
see
look
take
bring
feel
say
study
learn
show
tell
teach
understand
appreciate
seem
sleep
care
matter
cause
spend
conduct
find
discover
publish
continue
persuade
decide
enjoy
entertain

welcome
visit
agree
argue
treat
realize
die
break
solve
accept
describe
recognize
prevent
wait
approve
mean
serve
limit/limited
run
ask
live
develop
help
educate
come
expect
remain
appear
maintain
rise
raise

consider
increase
decrease
decline
locate
exercise
stay
hear
improve
start
grow
try
turn
pay
move
communicate
spread
close
call
occupy
work
lack
believe-trust
tend-likely
act-behave
select-choose
happen-occur
want-hope-wish
establish-found

1

■ have / hǽv / 他
持つ

「持つ（含む）」の意味になるが、その範囲は実際の所有から、考え、感情、能力など様々なものにわたる。その他「（会議やパーティーなどを）開く」の意味も重要。

よくあるミス

- ～に対して劣等感を感じる
  - × feel an inferiority complex against ～
  - ○ **have** an inferiority complex against ～

  inferiority complexは基本的にいつでも単数。

頻出

- 会議を開く
  have a meeting
  holdよりも仰々しさがない。
- 日本には訪れる場所がたくさんある。
  Japan **has** a lot of places to visit
- ～するのに苦しむ（悪戦苦闘する）
  have a hard time Ving ～
  Ving ～がない場合は「つらい目に遭う」というような意味合い。

＊feelは「ある感情を経験する」という一時的なものであるに対し、haveには継続性がある。inferiority complexは瞬間的に感じるものではなく継続して感じるものなのでhaveとなると考えると良い。「彼がテストで良い点を取って私は劣等感を感じた」というように継続性が意図されていないときはfeel inferior to ～を使う。

2

■ make / mérk / 他
作る

「ものに力を加える」ことで何か別のものを生み出す、ということだ。そのため「作る」という意味になる。

例

- 寿司を握る
  make sushi
  通例、cookは「火を用いて料理を作ること」、prepareは「料理を準備して食べられる状態にしておくこと」を指すが、makeはこれらと同じ意味を含むこともできる。
- お金を稼ぐ
  make money
  「～で稼ぐ」といいたい場合はout of ～。
- その猫は良いペットになるだろう。
  The cat will **make** a good pet.
  「ある目的のための資質を備えている」という意味。目的語は「良いペット」のように必ず形容詞＋名詞というかたちにすること。
- ～でできている
  be made of/from ～
  ofは原形が残らない、いわば原料から作るという意味。fromは木などそのものを利用して作るときに使う。
- ～に進む
  make for ～
  ある場所に向かうこと。

＊produceはproduction（p.90）と同じく工場で作ること、createは何か創造性やこだわりを持って作ることというニュアンス。

3

■ use / jú:z（jú:s 名）/ 他 Ⓤ Ⓒ
使う、利用　利用法

主に何か目的があってその目的のために使うことを表す。動詞では、もの、ものの量（消費する）、才能、能力、権力（行使する）など様々なものを「使う」。名詞形もあり、「利用」「利用法」という意味ではa useのかたちか不可算名詞、「用途（利用目的）」という意味では可算名詞。

頻出

- ～に対して権力を行使する
  use（one's）power over ～
- 年間50トンの洗剤を消費する
  use 50 liters of detergent a year
- ～するのに（もの）を使う
  use sth to V ～
- インターネットの利用の広まり
  the widespread **use** of the internet
- 様々な用途がある
  have different **uses**
  have（a）use（s）（for ～）のかたちが頻出。
- 役に立つ（立たない）
  be of (no) use
  It is no using Ving ～で「～しても無駄である」という意味になるが、このuseと考え方は同じだ。

4

■ see / sí: / 自 他
見る　見える

「見る」の意味では、「あるものが視界に入ること」を意味することが多い。また視力の問題で「見える」「見えない」という時にも、can（not）see ～のかたちで頻出。その他、情報やものを「確認する」の意味も重要。

よくあるミス

- 映画を見る
  - △ watch a movie
  - ○ **see** a movie

  映画、劇などではseeが用いられる。映画館に行けば大きな画面で上映されているため、意識せずとも視界に入るからだと考える。

頻出

- 子供が道路で遊んでいるのが見える
  see the child playing on the road
- 彼の推測が正しいか確認する
  see if his guess is right
  ifの他に5W1Hや直接名詞も続く。
- 自分を社会の一員だと考える
  see oneself as a member of society
  regard asよりもこちらの方がよく使われる。

＊その他「見る」という意味の英単語を比較しておく。watchは起きていることに対して注意を払いじっと見ること。gazeは知らず知らずのうちにじっとと見ること、stareは凝視することである。このうちgaze, stareは自動詞のため必ず対象を示すときはatなどの前置詞を伴う。

5

■ look / lʊ́k / 自（他）
見る

lookの「見る」は、主に「止まっているものに対して視線を向けた結果、見ることができる」という意味。これはatなどを用いてどこに視線を向けるか指定する必要がある。外観や様子から「～のように見える」という意味も重要。

よくあるミス

- 鏡を見る
  △ look at a mirror
  ○ **look in** a mirror
  atだけ覚えておくのは危険。「鏡を見る」は鏡に映った、その中にいるものを見るためinが使われると考えると良い。単に鏡そのものに視線を向けるのならat。

頻出

- （人）を見下す、軽視する
  look down on sb
  look down onは相手との立場の差から「見下す」、「軽視する」であるため人にのみ用いられる。
- ～をざっくり見る
  look ~ over
  look through ~だと「（本や新聞に）さっと目を通す」になる。
- 彼は動揺しているようだ。
  He **looks** upset.
  lookに続いてtiredなどの形容詞やas if SV ~、〈like+名詞〉が来る。

＊自動詞で「探す」の意味も頻出。これはsearchよりも日常的な場面で使われる。look for ~「～（場所）を探す」を基本として、under ~「～の下を」などを使えると良い。

6

■ take / téɪk / 他自
取る

自分のところへ取り込むこと。「連れていく」という意味は、人の手を取りある場所に連れていくことから来ている。アドバイスを受け入れる（**take one's advice**）も「アドバイスを自分に取り込むこと」と考えられるだろう。

よくあるミス

- エコバッグを持ち歩く
  × take an eco-bag
  ○ **carry** a reusable bag
  「持ち歩く（携帯する）」と言いたいときはcarryを使うこと。
- 傘を持っていきなさい。
  △ Take your umbrella.
  ○ **Take** an umbrella **with you**.
  take one's umbrellaは「どこへ～」（to ~）と傘自体を持っていく先がある時に使われる。

頻出

- AIが人の仕事を奪うかもしれない。
  AI may **take**（**take away**）human jobs.
  takeの代わりに**steal**（盗む）とすると違和感がある。
- 簡単な例を挙げると、～
  To **take** a simple example, ~
- ～するのに多大な時間がかかる
  It **takes** a lot of time to V ~
  時間の他に努力、お金などと相性が良い。
- ～を考慮に入れる
  take ~ into account
  take no account of ~「～を考慮（眼中）に入れない」、「～を無視する」。

7

■ bring / bríŋ / 他
持ってくる（連れてくる）

「話題に上っているところ、もしくは視点のあるところへ何かを持ってくる」という意味をしっかり把握しておこう。ものだけでなく人にも用いることができる。また、ものをある状態へと移すことから「もたらす」にもなる。

よくあるミス

- （人）を育てる
  × grow up sb
  ○ **bring up** sb
  bring upは人に対してしか使わない。

頻出

- ～に平和をもたらす
  bring peace to ~
  混沌（**chaos**）戦争（**war**）などとも相性が良い。
- （人/もの）に～を持ってくる
  bring sb/sth ~
  bring ~ to sb/sth

＊takeは単にある場所から別の場所に「持っていくこと」を指す。そのため「持っていく」という日本語になる場合でも、相手の視点を重視していた場合にはbringが使われることもある。例えば、友達に「君の家に本を持っていく」と言いたいときに、友達の視点からすると「持ってくる」のため、bringが使われることがあるということだ。また、fetchは「行って持ってくる」という意味で、bringとは異なり始点と終点が同じである。

8

■ feel / fíːl / 他自
感じる

心で感じる場合と触れて実際に感じる場合とがあるが、ライティングにおいては心で感じることを表現する。心で感じる場合は、ある感情を感じることや何かが起きていると感じること、「彼は～だと感じる」のように意見を持つことを指す。

頻出

- ～に罪悪感を感じる
  feel guilty about ~
- （人）が～している/するのを感じる
  feel sb Ving / V ~
  この意味でのfeelが進行形にはならないことはかなり注意すべきポイント。
- Sが～だと感じる
  feel that SV ~
  意見を持つときに用いられ「～だと思う」とも訳せるが、あくまで感情からの判断であり、事実から判断しているわけではない。How do you feel about ~?（～についてどう思いますか）のfeelはこれに当てはまる。

＊実はかなり難しい単語であると思われる。というのも、日本語では「自然を感じる」など英語にはない「感じる」があるためだ。

9

■ say / séɪ / 他 自
言う

他動詞としてのsayは、発言のみに留まらず「情報を伝える」ということを表す。つまり、動詞そのものよりも伝える内容に重点があるのだ。そのため、基本は「言う」という訳になるものの、それ以外にも「(文字で)示す」という意味になることもある。

頻出

- (一般的に)Sが～と言われている
  It is said that SV ～
  People/They say that SV ～と同義。
- ～という記事
  an article **saying** that SV ～
  an article that **says** ～
  記事やニュース、手紙、掲示物などには同格のthatを用いることができない。そのためこのかたちにすること。

＊Needless to say(いうまでもなく)、It goes without saying that SV ～(Sが～であることはいうまでもない)という表現があるが、普通はいうまでもないならいう必要はないためネイティブの文章ではあまり見かけない。特に後者については使用頻度が非常に低い。もちろん使っても構わないが、書く必要性が本当にあるのかどうか考えること。なおIt is needless to say というかたちは間違い。

＊実はan article saying ～などの表現は「記事は話さない」という考えから好まない人もいる。代わりに、**The author says that ～**という表現が挙げられる。

10

■ study / stʌ́di / 自 他
勉強する 研究する 調査する

ある科目を「勉強する」、または科学的手法で緻密に「研究する」「調査する」という意味になる。「勉強する」という意味で用いるにあたって最も重要な点は、studyはlearnよりも「勉強している過程」に意識が向いているということだ。「知識を得た」という結果よりも「知識を得るための過程」が重要なのだ。また、learnよりも自発性が重視されるという面もある。

例

- ～になるために/に備えて勉強する
  study to be/for ～
  study for a exam(試験に備えて勉強する)、study to be a teacher(先生になるために勉強する)などの表現となる。
- 留学する
  study abroad
  「(場所)で留学する」といいたいときはstudy in somewhere。
- どのようにSが～するか研究する
  study how SV ～

11

■ learn / lə́ːn / 他 自
学ぶ

「学ぶ」という日本語になるが、学ぶ過程よりも学んで知識や技術を身につけることに重点が置かれる。

よくあるミス

- 私はめったに歴史を学ばない。
  × I rarely learn history.
  ○ I rarely **study** history.
  説明にある通り、learnは知識を身につけた結果が重要なときに使う。そのため、「めったに」のように頻度を示す場合や過程が強調される場合はstudyを使う。

頻出

- ～の仕方を学ぶ/～することを学ぶ(できるようになる)
  learn to V ～
  「～することを学ぶ」という意味では**learn to accept it**(それを受け入れられるようになる)という表現が頻出。「～の仕方を学ぶ」という意味では〈**learn how to V ～**〉にしても問題ない。
- ～から学ぶ
  learn from ～
  人や、経験(**experience**)失敗(**one's mistakes**)が頻出。
- 英語について学ぶ
  learn about English
  言語としての英語ではなく「英語」とはどういうものかを学ぶ。

12

■ show / ʃóu / 他 自
見せる 示す

「あること、ものを人に見せられるかたちで示す」というのが原義。そこから「(ものや感情など様々なものを)見せる」、「(事実などを)示す」、「(何かを提示しながら)説明する」、「案内する」という意味になる。

例

- (もの)を(人)に見せる
  show sth to sb
  show sb sth
- 研究が～であることを示す
  Studies **show** that SV ～
  evidence(証拠)とも相性が良い。この表現では**indicate**の方がよりフォーマル。
- (人)を～に案内する
  show sb to ～

＊showは「展示する」に近い意味になる場合もある。**exhibit**(展示する)との違いは、showが単にある場所において人に見せられる状態にしておくことをいうのに対し、exhibitは公共の場に展示し誰でも見られる状態にしておくことをいう。

13

■ tell / tél / 他 自
伝える 見分ける

「伝える（教える）」の意味では誰に伝えるかに重点が置かれる。そのため一部の表現を除いては必ず〈**tell** ＋ 人〉というかたちにしなくてはならない。〈**tell** ＋ 人 ＋ もの〉というかたちは「～を教える」という日本語になるときにのみ使用可能。「～のことを教える」と言い換えられる場合には使うことができない。例えば、tell him my nameは「彼に名前を教える」であり名前のことを教えるのではない。

よくあるミス

- 頑固だといわれる。
  △ I am said to be stubborn.
  ○ I am **told** that I am stubborn.
  sayを使うと周囲からの評判として頑固だといわれているニュアンス。そうではなく、直接人から頑固だといわれると伝えたいときにはtellを使う。
- 彼があのレストランを教えてくれた。
  × He told me the restaurant.
  ○ He **told** me about the restaurant.
  説明にある通り。前者では「レストラン」という言葉を教えたということになってしまう。aboutをつけない主なものは **a lie**（嘘）**a secret**（秘密）**the truth**（真実）**a joke**（冗談）など。なお、tell a lie/the truth/a jokeなどは「誰に」を書かなくても良い表現。

頻出

- 彼が嘘をついていることが分かる。
  I can **tell** that he is lying.
  「（何らかの兆候によって）分かる」の意味ではcan/cannotをつけることがほとんど。自動詞として使うこともできる。
- （Aによって）～の違いを見分ける
  tell the difference between ~ (from A)
- 彼にその仕事をするように言う
  tell him to do the task
  not to V ~, that SV ~, howなども用いられるが、どの場合も必ず「やらなくてはならないと伝える」という意味になる。そのためthat SVの節ではhave toがよく用いられる。

「（人）に～しないように言う」

特定のコロケーション、主にtell sb not to do~「（人）に～しないように言う」以外では、「～しないように」はnot to do~ではなく、in order not to do~を用いよう。

14

■ teach / tíːtʃ / 他 自
教える

「伝える」ではなく「教授する」の意味での「教える」。教えるものは科目、技術、方法など様々。「（どのように行動すべきかを）教える」という意味や、状況（事実）や経験（出来事）を主語にとり「～によって分かる」という意味にもなる。ただし後者の意味では「人生において大事なことが分かる」というニュアンスになるので気軽に用いるのは避けた方が良い。

よくあるミス

- 見知らぬ人に道を教える
  × teach a stranger the way
  ○ **tell** a stranger the way/route
  方法を教える場合にはteachも用いられる。

頻出

- 生徒に数学を教える
  teach students math
  teach math **to** students
  「～について教える」は〈**teach** ＋ 人 ＋ **about** ~〉というかたちにすること。
- 若者に人との交流の仕方を教える
  teach the young (how) to interact with others
- 人を尊敬することを教わる
  be taught to respect others
- その経験によりお金がすべてだと分かった。
  The experience has **taught** me that money is everything.

15

■ understand / ʌ̀ndərstǽnd / 自 他
理解する、分かる

「理解する」という日本語になるが、「理解する」という動作よりも、あることに対する知識を得た結果「理解している状態である」ことを示すことが多い。

頻出

- 言っていることを理解させる
  make oneself **understood**
  主に他国語で伝えるときに用いる表現なので、in English（英語で）などを伴うことが多い。
- （人）が～するのも頷ける
  can understand sb Ving ~
- ～についての理解を深める
  understand more about ~
- 彼の言うことが理解できない。
  I cannot **understand** him.